

特集

眼部悪性腫瘍の診断と治療

序 論

後藤 浩*

数ある眼疾患のなかでも、眼腫瘍の頻度は決して高くはない。眼瞼に生じる母斑や疣贅も腫瘍であるが、これらの疾患はありふれているために腫瘍として認識されていないかもしれない。一方、悪性の眼腫瘍に遭遇することは極めてまれであるために正しく診断されてない、あるいは誤った診断のもとに適切でない治療が行われてしまっている事例が散見される。このような背景のもと、本特集では代表的な眼部悪性腫瘍について、その診断のエッセンスとともに、現在、主に本邦で行われている治療の一端を紹介していただくことにした。

中島勇魚先生と辻 英貴先生には代表的な悪性眼瞼腫瘍のひとつである脂腺癌の疫学、臨床診断のポイント、病理組織学的特徴、そして治療法について解説していただいた。脂腺癌は霰粒腫や慢性結膜炎との鑑別を要する、最も重要な外眼部疾患であることを忘れてはならない。田上瑞記先生には眼窩に発生する悪性腫瘍中で最も頻度の高いリンパ腫について、なかでも比較的予後良好なことが多い MALT リンパ腫と、対照的に悪性度の高いびまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫 (DLBCL) について、具体例を交えながら病態の特徴と診断の重要性について紹介していただいた。柚木達也先生には代表的な悪性上皮性涙腺腫瘍であり、生命予後的にも極めて悪性度が高い腺様嚢胞癌について、画像検査上の特徴と治療の難しさを中心に解説していただいた。現在、涙腺原発の腺様嚢胞癌については炭素イオン線(重粒子線)による治療

が行われることもあるが、治療成績の向上目的に線量が増量されて以来、眼局所の副作用のコントロールに悩まされる症例が増えているという現状がある。武田篤信先生にはぶどう膜網膜炎との鑑別がしばしば問題となる硝子体網膜リンパ腫について、multimodal imaging を駆使した臨床診断、眼内に浸潤した細胞を用いた確定診断と補助診断、さらに眼局所治療の実際と治療成績について詳細に解説していただいた。硝子体網膜リンパ腫の治療における最大の問題点は、メトトレキサート (MTX) の硝子体内注射等によって眼病変をコントロールできたとしても、中枢神経系 (CNS) をはじめとする眼外リンパ腫の発生の抑制にはつながらない点にある。なかでも生命予後を脅かすことになる CNS リンパ腫に対するさまざまな最近の治療の実際と成績については、血液内科がご専門の田岡和城先生に紹介していただいた。硝子体網膜リンパ腫に対する治療後の CNS リンパ腫の発症予防を目的として、ブルトン型チロシンキナーゼ阻害薬の効果を評価するための治験が田岡先生を中心に現在進行中であるが、その成績が開示されるにはまだ数年の月日を要する。

眼部悪性腫瘍全般にいええることは、できるだけ早期に悪性腫瘍であることを疑い、必要に応じて専門施設に診断ならびに治療を依頼することに尽きる。希少疾患であるがゆえに診断が難しいことは致し方ないことではあるが、診療に際して何らかの“違和感”を覚えた際には、悪性腫瘍の可能性を頭の片隅に置いておくことが大切である。

*Hiroshi Goto 東京医科大学 臨床医学系眼科学分野